

道 徳

北 野 美 紀
盛 一 純 平

1 道徳における学びを豊かにする聞き合い

道徳的価値
道徳的実践力

学習指導要領より
※¹道徳的心情
よりよい生き方を志向する感情
※²道徳的判断力
善悪を判断する力
※³道徳的実践意欲
価値ある行動をとろうとする意志の働き
※⁴道徳的態度
具体的な道徳的行為への身構え

道徳の時間の目的は、学校の教育活動全体における道徳教育を補充・深化・統合し、道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深め、「道徳的実践力」を育成するものである。それは、言いかえれば、人間としてよりよく生きていく力であり、将来に生きる内面的な資質の育成と言える。

この「道徳的実践力」を育成するために、基盤となるのが道徳的心情^{※1}・道徳的判断力^{※2}・道徳的実践意欲^{※3}・道徳的態度^{※4}である。子どもは、多様な体験をしたとしても、道徳的価値の意味や自己とのかかわりを考えないまま過ごしてしまう。そこで、道徳の時間は、日々の体験をもとに聞き合いを通して子どもに新たな感じ方や考え方を生み出す役割を持っている。

ここで行なわれる聞き合いには、一人一人の経験からくる子どもの本音を出し合うことが前提となってくる。そのためにも互いの存在を肯定し合える関係が必要不可欠となる。

聞き合いの中では、経験やその時に感じた思い、さらには道徳的価値についての多様なとらえに違いが見え始め、心に揺れや疑問が生じる。そして、この揺れや疑問は、多様な考えを比較し分類することで、確かな道徳的実践力の育成に向けた具体的な行動として再構成されていく。

道徳の時間は、課題に対して一つの結論を求めるものではない。聞き合いによって価値についての多様な考えに出会い、個の考えを深めたり、広めたりする。このように、価値に対する新たな考えを獲得し、道徳的実践力を育成していくことを道徳における「豊かな学び」ととらえる。

以上のことから、道徳における学びを豊かにする聞き合いを次のように設定し、取り組むこととする。

内省

他の考えと自分の考えを比較し 共感し合うことで 個の内省をくり返し
内面的な資質を高めていく聞き合い

2 聞き合いのために

(1) 子どもにつけたい態度

道徳的価値の大切さを理解していても、それを実現していくのは難しい。自分の生活と照らし合わせながら、少しでも道徳的実践意欲を高めようという態度に繋げなければならない。

また、同じ状況に置かれた時にも、人によって感じ方や考え方がそれぞれ違う。道徳的価値を実現していくには、多様な考え方があっていいと認める態度が必要である。そのためには、様々なコミュニケーション体験を通じて、自己を開放する経験を多く積むことで、一人一人が学級内での所属感を感じ、自己を肯定し、他を認めることができるようにしていく。

(2) 子どもに共有させておきたいこと

道徳の時間を中心にした学校生活全体の中で、子どもが道徳的価値の大切さにふれる機会を多く作る。例えば、あいさつやきまりのような基本的生活習慣

については毎日の生活のふり返りの場を使って意識を継続させていく。さらに、個々の経験や日常の出来事をできるだけ全体の体験として積み重ね、共有できるようにする。そのことがよりよい生き方を考えるきっかけや根拠となり、聞き合いがより具体的に進む。

また、時には共感的に、時には批判的に、時には感動的に資料に寄り添う経験を積みながら、子どもの実態に応じた課題を提示しながら多様な考えを引き出していく。

3 関係づけ再構成する手だて

(1) 考えを比較・共有するための視覚的表現の工夫

ねらいとする価値に迫る際、一人の子どもの思考の中に多様な考えが入り交じることがある。そこで、教材・教具を工夫したり、役割演技など言語以外の表現方法を用いて視覚的に表したりすることで、複雑な気持ちを素直に表現できるようにする。例えば、心のカードを使って個々の考えが少しずつ違って表れると、その考えの根拠となるものや他との違いを言語化してより具体的に伝えようとする意欲に繋がる。さらに、それを記録することが自己の変容の自覚を高めていくための手段にもなる。少人数ならば、ホワイトボードを用いた方法で効果的に可視化した後、全体に考えを広めたり、互いの考えを比べたりすることも有効である。また、考えの分類が容易にできるように付箋を用いることや視点を変えて考えられるようにワークシートの形式を工夫する。そうすることで、あらたな価値に対する気づきが生まれることが期待できる。

(2) 目的に応じた交流の工夫

ねらいとする価値や資料によっては、葛藤が生じ互いの意見が対立する場面が考えられる。そのような場合、自分の考えの強化や補足、価値の追求のために、ペアや少人数グループを利用した聞き合いの活動を取り入れる。共通意見・対立意見を明確にして意図的にグループを編成したり、ランダムなグループ編成をしたりしながら多様な考えに触れられる場を設ける。その後、聞き合いを全体へ広める場合には、自由に考えを出す、グループごとに発表する、教師から意図的に指名するなどの工夫をする。さらに、板書で関係づけの手助けをする。子どもの実態とねらいを見据えて、再構成に向かうために有効な交流を仕組んでいく。このように、多様な考えに出会う場を工夫することで、価値に対する個の考えに揺れが生じやすくなる。さらにその揺れを解決するために、視点をしばった全体での聞き合いが必要となり、より高い価値の創造に向けて再構成するきっかけとなる。

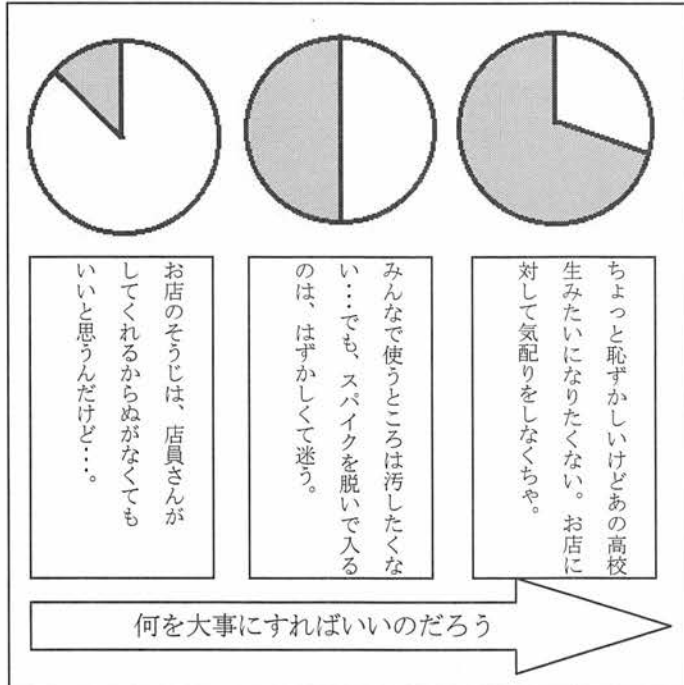
(3) 内省を促す場の工夫

ノートやワークシートに書きながら考えを見つめ直す時間を確実にとる。その時、ペアやグループで考えを受けとめ合うような工夫を取り入れ、段階的に個の内省へと深めていく手だてをとる。そうすることで考えの変容やその理由がより明確になる。また、聞き合い以前の個の考えを残しておくことが、聞き合いを終えたときの考えの変容の記録となる。少し前の自分の考えを客観的に見ることができれば、聞き合いによって強化されたことや新しく得たことを意識しやすい。

4 実践例

(1) 考えを比較・共有するための視覚的表現の工夫

① 心のカードの活用

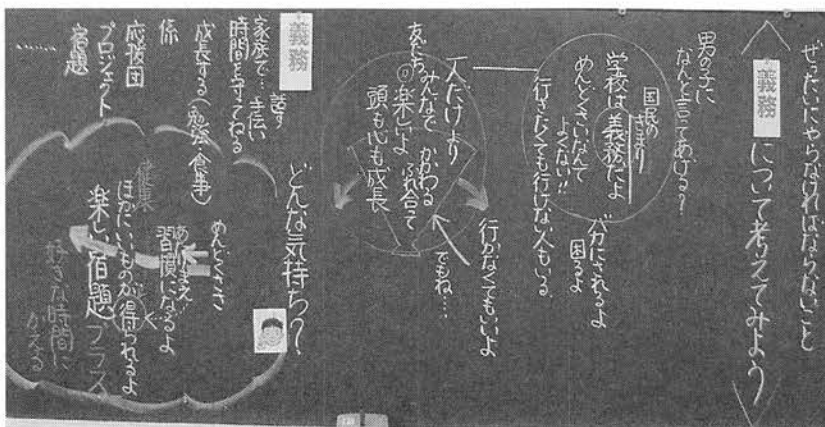


資料1 心のカードを使った考えの比較・共有

「どろだらけのスパイク」(学研6年: 公德心)では、どろのついたスパイクをコンビニの前でぬぐうかぬぐまいか迷っている主人公の気持ちを心のカードを使って2色で表した(資料1)。主人公の心の揺れを視覚的に表したことで、言語化しやすくなった。ぬぐことをはずかしく感じる気持ち(自分中心の気持ち)と店の人やお客さんに迷惑をかけたくない気持ち(他への思いやり)がはっきりと見えてきた。その上で、やはりぬぐと決め、店へ入った主人公が大切にしかかったことは何かについての聞き合いへと進んだ。迷いの理由を明確にさせたことで、自分の気持ちよりまわりの人の気持ちを考えて行動することの大切さに気付いていった。

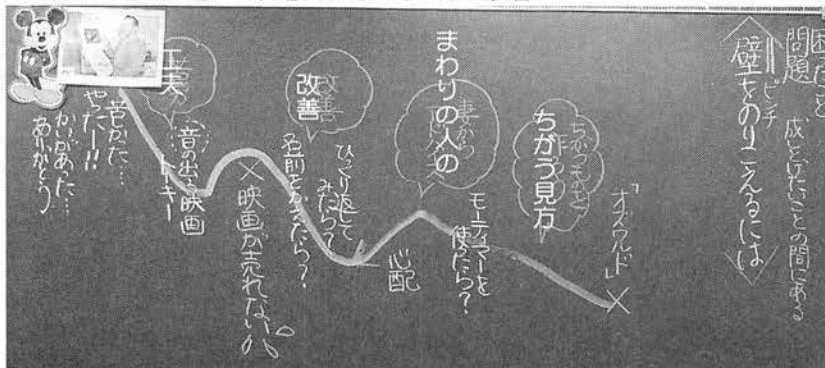
② 板書の活用

全体で意見を出し合う際には、板書が関係づけの手助けになる。例えば、子どもの言葉を丁寧



資料2 考えの違いに目を向けさせるための板書

に記す板書では、一人一人の考えの微妙な違いに気付かせることができる。「学校に行くことは自分のためなんだ」という考えの中にも、「楽しいことがたくさんあるから」「将来の自分にとって大事な成長につながるから」といった根拠の違いが見えた(資料2)。



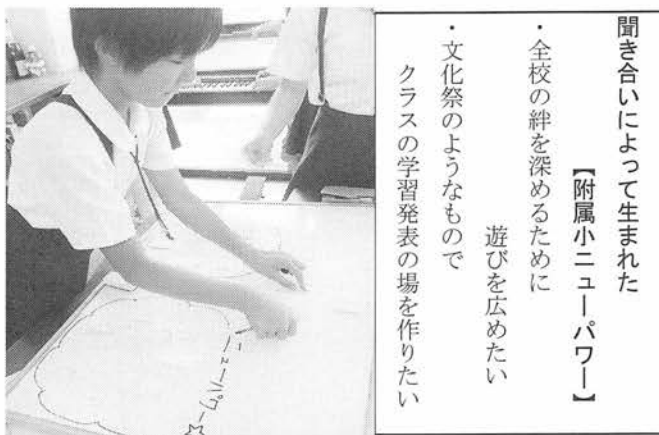
資料3 キーワードを意識させるための板書

また、ウォルト=ディズニーは壁を乗り越えるためにどうしたか、という問いに対して「アドバイスに耳を傾ける」「新しい視点をもつ」「工夫を重ねる」のキーワードで表した(資料3)。キーワードをもとにすることで、一人一人が自分の生活に置き換えやすく、内省につながりやすく

なった。このように、構造的な板書を工夫することが、ねらいとする関係づけ再構成に向かうために有効だった。

③ 付箋の活用（学活との有機的関連）

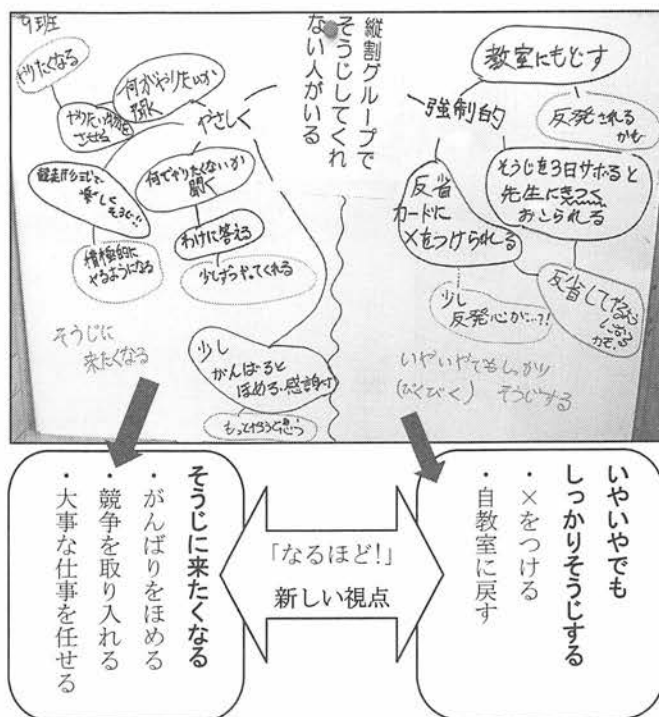
「よりよい校風を作る」（心のノート：愛校心）では、自分たちの今を見つめる際、付箋を用いた。ピンク色の付箋には「附属小学校のステキ」として自分たちの学校の良さを書き、水色の付箋には「附属小のザンネン」として改善すべき点を書いた。その後、付箋を分類していくうちに新しくスタートさせてみたい活動が見えてきた（資料4）。そこで、黄色い付箋に「附属小のニューパワー」として自分たちがめざす附属小学校を具体化して書いていった。後輩たちに大好きな学校を受け継いでもらうためにも自分たちがよりよい校風を作れないだろうかと思いつめ直す姿が見られた。考えを分類しやすく、その後の再構成につなぐために付箋は有効であった。



資料4 付箋を使った関係づけ

④ ホワイトボードの活用（学活との有機的関連）

「ミッキーマウスの誕生」（学研6年：創意・進取）では、展開後段の体験活動でホワイトボードを使って自分たちの生活を創意によって変えていこうとする体験を取り入れた。壁を乗り越える際には、まわりの人からのアドバイスに耳を傾けたり、新しい視点を持って考えることが必要である。このことを体験するために、グループでホワイトボードを用い自由な発想を書き残していた（資料5）。意見をつなぐ時は、使い慣れているマッピングを用いたり、大切にしたい中身を分類して色分けしたり、囲んだりしながら積極的に関係づけを進めることができた。この話し合いの中で、同じ状況に置かれた場合でも、人によって感じ方や考え方が違うことを実感していた。書き上がったホワイトボード上には、価値に対するキーワードが明確に表され、これからの自分の行動を考える上で大切にしたい価値の基準がイメージしやすくなった。



資料5 ホワイトボードを使った関係づけ再構成

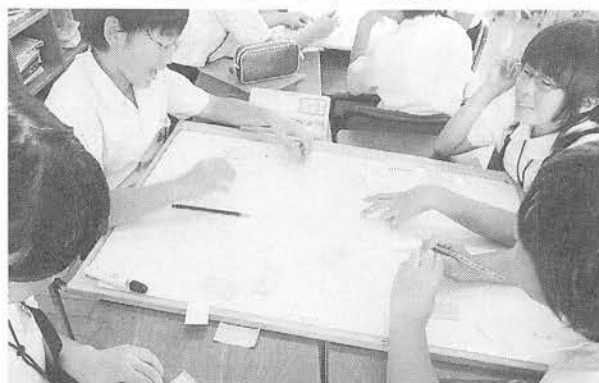
(2) 目的に応じた交流の工夫

① ペア交流・グループ交流

「散らかし魔」（東京書籍6年：基本的生活習慣）の学習では、身の回りの整理整頓が苦手な主人公の気持ちを考える際、ペア交流やグループ交流を行った。

グループ交流での安心感にも助けられて、子どもから多様な考えが引き出され、関係づけがしやすくなる。また、グループ交流によって互いの考えを正確に聞き合うことができ、比較できる。「もう1回言って」「でも、～じゃない？」というような自然な問いかけが生まれやすく、聞き合いの中で意見の対立や強化などの関係づけがはっきりと浮かび上がってきた。

「よりよい校風を作る」（心のノート：愛校心）では、ワールドカフェの形態を取り入れてグループ交流を行った（資料6）。1回目のグループ交流の時間のあと、メンバーを入れ替えて再度交流を行うことで、新たな考えに出会ったり、考えを強めたりすることができた。例えば1回目の交流では「うちの学校はプロジェクトをがんばっている」「たてわりそうじをがんばっている」といった高学年としての視点にこだわって考えていた子が、2回目の交流で

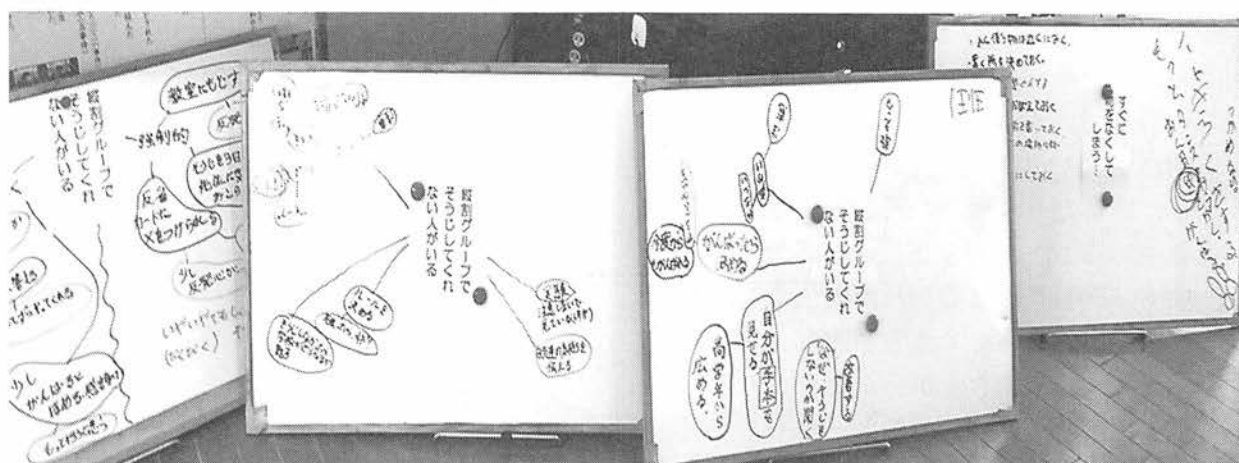


資料6 グループメンバーを変えることで視点を変える

「暑くても元気に遊ぶ子が多いね」「男女の仲がいいよね」と視点を増やしていった。また、「バスマナーが悪い」とマイナスに目が向いていた子が、「年上の学年がバスの中で注意してくれたことがあったよ」という意見を聞いて「年下の学年の面倒をみるのが上手なのかも」と視点を変えて考えることができた。

② 全体交流

ホワイトボードミーティングや付箋を使ったグループ交流の後は、各グループで残した記録を見合ったり簡単に紹介し合ったりする時間を設けた（資料7）。これは、短時間でもたくさんの意見を関係づけられる有効な手だてとなる。「自分たちになかった考えはないだろうか」と視点をしばって記録を見合うことで、子どもは、共通点や相違点を考えながら、さらに疑問点を出した。このようにグループ交流を経た後、全体での聞き合いをすることが、価値についての思考を整理するために役立った。



資料7 グループ交流から全体交流へ

(3) 内省を促す場の工夫

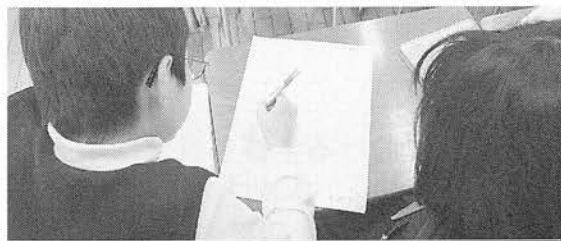
① 段階的な内省

「きえた紙くず」（学研6年：愛校心）の学習では、個の内省の時間を持つ前に、ペアやグループでのふりかえりを持ち、段階的に内省できるようにした。全体での聞き合いを終えて、その時の率直な考えを出せるよう「鉛筆トーク」を試みた。「鉛筆トーク」では、筆談でコミ

コミュニケーションを図り、静かな空間の中で学習をふり返ることができる(資料8)。鉛筆トークは、自分の意見を必ず受けとめてもらえる安心感があり、書く時間を待つことで考える時間が保証されること、変容の記録が残ることなどのメリットを考えると、再構成には有効な手だてであった。

② ワークシート・道徳ノートの活用

「ミッキーマウスの誕生」(学研6年:創意・進取)では、あらかじめワークシートに「①今まで学校生活の中で工夫してみてもうまかったこと」と「②うまくいかずにあきらめたこと(今、困っていること)」を書かせた。ワークシートが価値の方向付けとなり、変容を意識するための一助となった。授業の導入や終末で今までの自分を見つめる時間を長くとることは難しく、ねらいを押さえられないまま終わってしまうことがある。その点、事前に自分の生活をふり返っておくことで、創意工夫した経験や今後生かしてみたい場面をイメージしやすくなる考えた。また、教師がそれを事前に把握しておくことが、関係づけ再構成に向かわせる手だてとなる。今の生活に課題を感じ、なんとか解決したいと向き合う子どもの思いと、自らの工夫によって問題を改善した経験をもつ子どもの思いを関係づけることができた(資料9)。その結果、自分の生活も視点を変えて創意工夫すれば変わるのではないかという内省につながった。



- A: 学校をよくするって難しいんじゃない
 B: でも、ゴミを拾うとかならできそう
 A: 小さなことでいいから、しようとする気持ち
 が大切なのかもしれない
 B: なるほどね
 A: 自分たちにもできることがありそう
 B: うん

資料8 鉛筆トークを使ってペアで行う内省

① 今まで学校生活の中で工夫してみてもうまかったこと
 「縦わりそうじグループをまとめるのは難しい」
 「仲良しランチの時間を
 どうやって盛り上げたらいいのかわからない」

② うまくいかずにあきらめたこと(今、困っていること)
 「なかなかじめなかつたそうじグループで、
 お互いの呼び方を変えてみたらどんどん話がはずんだ」
 「運動会の応援合戦を盛り上げるために
 赤組新聞を作ってみたら人がたくさん集まってくれた」

③ 学習を終えて
 何か他の方法も考えてみようかな
 創意工夫

聞き合い

5 成果と課題

資料9 ワークシートを使った聞き合いで生まれる変容

成果として、まず1点目に子どもの心の揺れを表現する手だてを工夫することで、多様な子どもの考えが関係づけできた。子どもの実態に応じ、必要感のある課題や発問に子どもの心は揺れる。その揺れを言語化し聞き合いを成立させるには、表現する際の抵抗を取り除かなければならない。そのために視覚的表現や交流方法の工夫は有効であり、思考の関係づけをしながら価値をより強く自覚できた。2点目に、個の思考の再構成に向かうために交流や内省の場を工夫することは有効だった。意図的に交流を仕組むことで思考の関係づけが進み、その後の内省も深まった。自分の生活に重ねて考えることで必要感が生まれ、道徳的態度が養われた。

道徳の時間の学習によって、道徳的価値を理解し、子どもは内省を重ねながら道徳的心情や道徳的判断力を身につけてきている。しかし、その力を確かな道徳的実践力につなげるためには、さらに有効な手だてを探る必要がある。必要感のある資料提示や心の揺れを生む関係づけのために、丁寧に内省を重ねていかなければならない。この積み重ねにより、道徳的実践力が高まると考える。